

隔週刊

ウィーン・フィル
魅惑の名曲

SHOGAKUKAN CD MAGAZINE

創刊記念
特別価格 **690**円

2/2 隔週火曜日発売

The Wonderful Sounds of

vol. **1**

Wiener Philharmoniker

ドヴォルザーク **1**

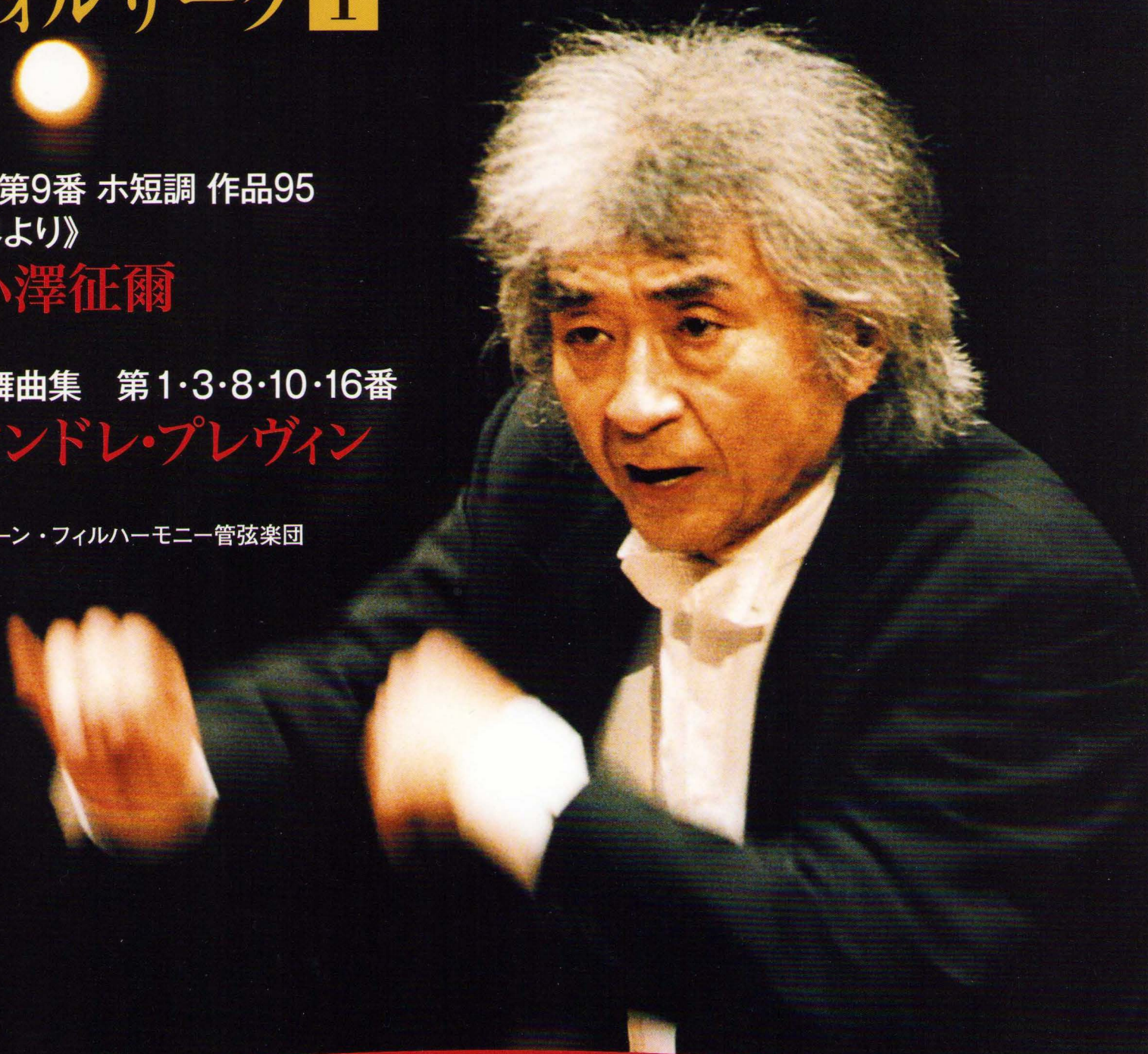
交響曲 第9番 ホ短調 作品95
《新世界より》

指揮=**小澤征爾**

スラヴ舞曲集 第1・3・8・10・16番

指揮=**アンドレ・プレヴィン**

演奏=ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団



連載

ウィーン・フィルを めぐる断章

vol.1 ウィーン・フィルの「魅力」とは何なのか？

1842年に誕生以来、聴衆はもちろん、名だたる指揮者や作曲家たちにも支持されながら、その伝統を受け継いできたウィーン・フィル。

160年以上を経た今なお、世界随一と評されるオーケストラの魅力を探る。

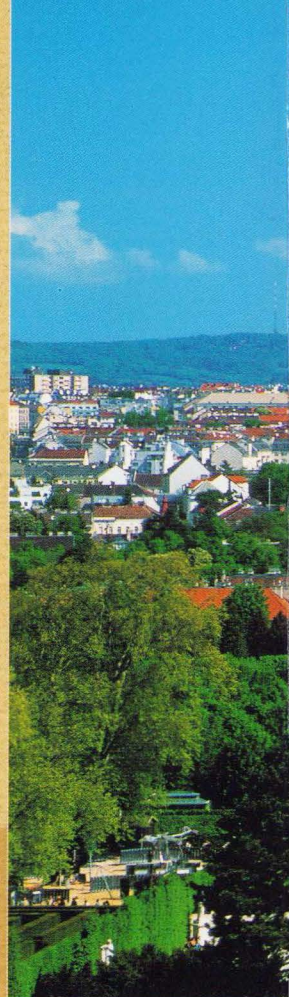
岡田暁生

Akeo Okada

1960京都市生まれ。大阪大学大学院博士課程単位取得満期退学。大阪大学文学部助手、神戸大学発達科学部助教授を経て、現在京都大学人文科学研究所准教授。文学博士。著書に『オペラの運命』（中公新書・2001年度サントリー学芸賞受賞）、『ピアニストになりたい!』（春秋社・2008年度芸術選奨文部科学大臣新人賞）、『音楽の聴き方』（中公新書・2009年度第19回吉田秀和賞受賞）などがある。

1695年、神聖ローマ帝国皇帝レオポルド1世（在位1658～1705）によって夏の離宮として建てられたシェーンブルン宮殿とウィーンの街並み。

Photo by AFLQ



人々を魅了する唯一無二の存在

「～の魅力」という言い方がある。いわく「フィレンツェの魅力」「バレエの魅力」「ゴッホの魅力」「モーツァルトの魅力」等々。では「世に喧伝されたウィーン・フィルの魅力とはいったい何なのか？」と問われれば、冗談と思われるかもしれないが、私は必ず次のように答えることにしている——「ウィーン・フィ



オランダのアムステルダムにあるコンサートホール「コンセルトヘボウ」。ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団の本拠地として使用されている。

©YOSHIO TOMII/SEBUN PHOTO/amanaimages

ルの魅力とはまさに『魅力』のことなのだ」と。つまりウィーン・フィルは、例えばメカニク的なアンサンブル技術ではなく、まさに「人を魅了する力で勝負する」オーケストラなのである。

おそらく機能的にウィーン・フィルと対等の勝負ができるオーケストラは、ヨーロッパにはいくつか（「いくつも」とまでは言わないが）ある。有名なベルリン・フィルは言うまでもない。ドレスデンのオペラ劇場のオーケストラであるドレスデン・シュターツカペレも、古式ゆかしく重厚そのものの分厚い響きと、舌を巻く名人芸を結合させた、稀有のオーケストラだ。

また今日のヨーロッパで最もアンサンブルが充実していると定評があるのは、名匠マリス・ヤンソンス（1943～）が常任指揮者を務めているふたつのオーケストラ、つまりアムステルダムのロイヤル・コンセルトヘボウとミュンヘンのバイエルン放送交響楽団である。おそらくこのふたつのオーケストラは、ありとあらゆるレパートリーを満遍なくハイレベルでこなすという意味では、ウィーン・フィルを凌いでいると言って過言ではないはずである。そしてニューヨーク・フィルやボストン交響楽団やシカゴ交響楽団といったアメリカのオーケストラも、アンサンブル性能という意味では圧倒的である。

ちなみにこの場合の「性能」とは、自動車にたとえればわかりやすいかもしれない。例えば最高速度や馬力、加速やブレー





キの効き具合、運転のしやすさ(=どんな指揮者が振っても安定している)、故障しない(=難所でもアンサンブルが乱れない)、どんな道でも走れる(=どんなレパートリーでもこなせる)等々。これらの点でウィーン・フィルは、世界のトップレベルであることは確かであるにせよ、必ずしもライバルたちに圧倒的な差をつけているわけではない。

そもそもこのオーケストラの木管や金管などは、音色は比類なく魅力的だが、操作が難しい古いタイプの楽器を使っている。演奏困難な20世紀のモダン音楽(例えばイーゴリ・ストラヴィンスキー(1882~1971)の作品のような)を楽々と弾きこなすというわけには、なかなかいかない。このオーストリアの古都のオーケストラを、世界で唯一無二の存在たらしめているのは、実用的性能というよりむしろ、彼らが振りまくえもいわれぬ独特の「魅惑」なのである。

ウィーン・フィルは気位の高い愛人!?

上にいろいろと世界の名オーケストラの名前を挙げたが、これらのうちでウィーン・フィルと並ぶ圧倒的な知名度を誇っているのは、何と言ってもベルリン・フィルだろう。例えばヴィルヘルム・フルトヴェングラー(1886~1954)やヘルベルト・フォン・

カラヤン(1908~89)やカール・ベーム(1894~1981)といった伝説の巨匠指揮者たちの名声も、このふたつのオーケストラからつねに信頼を得ていたことによるところが多かったはずである。だがウィーン・フィルとベルリン・フィルの持ち味は、これ以上のコントラストは考えられないくらいに対照的だ。

フルトヴェングラーはベルリン・フィルの常任指揮者を長年務めつつ、ウィーン・フィルも毎年のように指揮していたが、決してウィーン・フィルの常任指揮者になろうとはしなかった。その理由について彼は、ウィーン・フィルはとても魅力的な愛人のようなものであって、妻として一緒に生活するにはベルリン・フィルのような律儀なオーケストラのほうがいいのだ、という意味のことを言っている(ちなみにフルトヴェングラーは稀代のプレイボーイとして名高かったので、この比喩はけっこう生々しいのだが)。危ういコケットな香気をまきちらし、決してこちらの思いどおりにはならない、気まぐれで気位の高い女性——たしかにウィーン・フィルにはそういうところがある。

よく言われるのは、ウィーン・フィルはあまり練習をしないということである(それに対してベルリン・フィルは、どんな凡庸な指揮者が来ても、一応律儀に練習につきあうと言われる)。あまり口やかましくトレーニングしようとする指揮者は、このオーケストラには好かれない。近年亡くなったカルロス・クライバー



2008年、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで演奏するベルリン・フィル。指揮は2002年9月より首席指揮者兼芸術監督を務めるサー・サイモン・ラトル(1955～)。

©C. Christodoulou / Lebrecht Music & Arts

(1930～2004) はウィーン・フィルとひじょうに相性がよかったが、それでもある演奏会のための練習に際して、曲の細部を徹底的にさらわせようとしたことが発端となり、オーケストラと険悪になって、しばらく両者の関係が疎遠になるということがあった。

ウィーン・フィルとうまくいくのは、阿吽^{あうん}の呼吸で通じるパートナーだ。ドイツの伝説の巨匠ハンス・クナッパーツブッシュ(1888～1965) は、ウィーン・フィルときわめてうまくいっていた指揮者だが、「君たちはこの曲をととてもよく知っている、私もよく知っている、だから今さらさう必要はないね」と練習を中止したことで名高い。またウィーン・フィルと相思相愛と言ってもいい仲だったアメリカ人のレナード・バーンスタイン(1918～90) は、初めてこのオーケストラを指揮したとき(リヒャルト・シュトラウス(1864～1949) の作品だったはずである)、「あなたたちは私よりもずっとこの曲をよく知っているはずですから、ぜひ私にいろいろ教えてください」と練習の最初で告げ、それでもって楽団員の心をつかんだというのは有名な話だ。

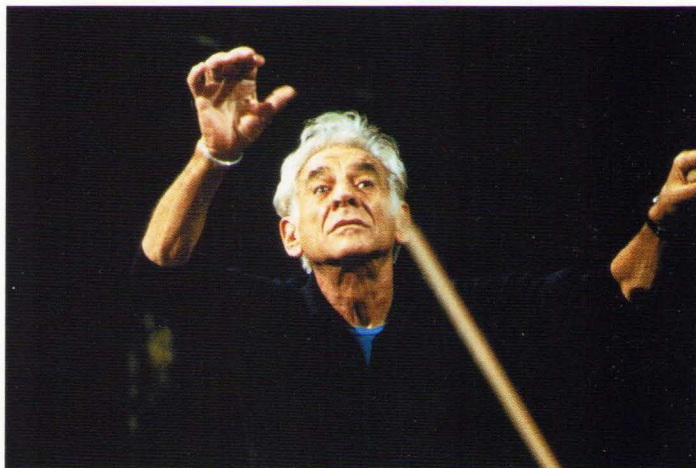
♪ 練習からは生まれない音楽の香気

フルトヴェングラーは「ベルリン・フィルと違ってウィーン・フィルは全然練習をしないんだが、でも本番になると結局あいつら(=ウィーン・フィル) のほうがうまく弾くんだ」と言っていた。おそらくウィーン・フィルが何より嫌うのは、真面目に練習ノルマ^{きょうりくノルマ}を汲々^{きふきふ}とこなすことによって、音楽がもつ香気のようなものが消し飛んでしまうことなのだろう。

クラシック音楽というのは「真面目な」音楽なのだから、「真面目に」練習しなくてはならないというようなイメージがある。

だが真面目さと色香は、むしろ両立しないことのほうが多い。大ピアニストのウラディーミル・ホロヴィッツ(1903～89) は——彼もまた練習嫌いで有名だったのだが——「練習をすればするほど悪くなる、練習はステージの上でやるのだ」と言っていたらしい。「真面目に励んだ成果を見てください」と言わんばかりの演奏を聴かされても、退屈なだけだということだろうか。

いずれにせよウィーン・フィルは、決して「がんばらない」。いつも優美に官能的に上品に、少しからかうような婀娜^{あだ}っぽさをまきちらしながら、聴き手の心を虜にする。このエレガントさこそ、ウィーン・フィルの響きを軽やかで官能的であると同時に、たとえようもなく貴族的なものにしているのだろう。



作曲家、ピアノの演奏家としても知られるアメリカ生まれの指揮者、バーンスタイン。カラヤンと並び、20世紀後半のクラシック音楽界を牽引。小澤征爾の師であることでも有名。
©UNIVERSAL MUSIC LLC



連載

マエストロの横顔

文=諸石幸生



ウィーン・フィルとの 幸福なる成果

小澤征爾は現在、ウィーン国立歌劇場の音楽監督である。ウィーン国立歌劇場管弦楽団のえり抜きのメンバーたちによって構成されているオーケストラがウィーン・フィルハーモニー管弦楽団であるが、小澤征爾が初めてこのオーケストラを指揮したのは1966年のザルツブルク音楽祭においてであった。そのとき、まだ31歳の若さだったが、小澤征爾はカラヤン、ベーム、ラファエル・クーベリック（1914～96）らとならんでウィーン・フィルの指揮台に立ち、記念すべきデビューとしているし、以来、オペラ公演を含めてウィーン・フィルとの関係を濃く、深くして、実に豊かな演奏活動を繰り広げるようになっていく。

もっともこのウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は本来が歌劇場を母体としているため、他のコンサート主体のオーケストラとは異なり、いわゆる定期演奏会というのがきわめて少ない。それは本拠地の楽友協会大ホールにおいて行われるのだが、年間、マチネ（昼の公演）が10回程度、ソワレ（夜の公演）が7回程度という少なさである。このことからウィーン・フィルを指揮することがいかに困難で、また限られた才能にしか与えられないかがわかってくるが、小澤征爾が初めてこの定期演奏会に登場したのは1990年のことであった。

やや遅かったかもしれないが、演奏会は空前の成功をおさめ、前年に亡くなったカラヤンの跡を継ぐべき存在としての魅力すら漂わせて、両者はさらに関係を密にし、このコンビの可能性に対する期待感が高められてきたのである。

1991年、小澤征爾は再び定期演奏会に招かれるが、そのときにライブ収録されたのがここに聴くドヴォルザークの交響曲第9番ホ短調作品95《新世界より》である。小澤征爾にとっても、

小澤征爾

Seiji Ozawa

1935年中国のシャンヤン（旧奉天）生まれ。桐朋学園で故斎藤秀雄に指揮を学ぶ。1959年ブザンソン国際指揮者コンクールで第1位獲得。翌年クーセヴィツキー賞受賞。カラヤン、バーンスタインらに師事した後、1962年にサンフランシスコ交響楽団を指揮し、北米デビュー。シカゴ交響楽団、トロント交響楽団などの指揮者・音楽監督を歴任し、1973年ボストン交響楽団の音楽監督に就任。ヨーロッパではベルリン・フィル、ウィーン・フィルなどを定期的に指揮し、2002～10年までウィーン国立歌劇場の音楽監督を務める。

Sachio Moroishi

1948年佐賀県生まれ。早稲田大学法学部卒業。（財）音楽鑑賞教育振興会において義務教育課程における鑑賞指導の研究、啓蒙に努めるとともに、『演奏家 大事典』を編纂。『音楽通信』（ステレオサウンド社）を創刊後、音楽評論家として雑誌、新聞、放送番組などで活躍。著書に『トスカニーニ、生涯と芸術』『クラシックがわかる超名盤100』（音楽之友社）、『演奏家新鮮組』（JICC）などがある。

ウィーン・フィルにとっても基本中の基本レパートリーであることはもちろんだが、意外にもウィーン・フィルが前回に取り上げたのは1985年のことで6年ぶりとなっているし、それは小澤征爾の恩師カラヤンの指揮であったというから面白い。ウィーン・フィルはゲルハルト・ヘッツェル、ライナー・キュッヒルというふたりのコンサートマスターで演奏に臨んだと伝えられるが、なるほど演奏内容は破格に素晴らしい。初々しい生命力をたたえた鮮度あざやかなドヴォルザークであり、音色といい、**カンタービレ**のしなやかさといい、燃えるような躍動感といい、生きた音楽が今この瞬間に生まれ、大きく羽ばたいていく、そんな充実感とも爽快感ともいえる感動がある。

ウィーン・フィルが誇る艶やかで、温かい弦楽器の魅力もさることながら、**ブラスセクション**の輝かしさがまた格別で、思わず手に汗させる。ただでさえ無類の魅力をもつオーケストラだが、小澤征爾の指揮のもと燃えに燃えた演奏が聴かれ、CDを前にした聴き手は熱くならざるをえない。

その後、「ドヴォルザーク：交響曲第8番」「ニューイヤー・コンサート2002」などの名盤を世に送り出していく小澤率いるウィーン・フィルだが、このドヴォルザークが最初の1枚であった。





ウィーン・フィルを聴く①

まろやかな音色の秘密

金子建志 (音楽評論家・指揮者)

『温かく迎える姿勢』に満ちたウィーン気質が
華やかな音楽文化を開花させた



小澤征爾とウィーン・フィルの「ニューイヤー・コンサート2002」。

小澤はこの世界的に有名なコンサートの指揮台に日本人指揮者として初めて立った。

©Terry Linke

温かく人懐っこいウィーン人

ウィーン・フィルは普段歌劇場で伴奏しているので、互いの音を聴きあって合わせるのが上手いといわれているが、ドレスデン国立歌劇場でもミラノ・スカラ座でも、所属のオーケストラがシュターツカペレ・ドレスデン等の別名を冠してコンサート活動をしている点は同じである。しかしウィーン・フィルの場合、なんともいえない温かさや、人懐っこさが『街の味』として出てくるように感じられる点が人気の秘密ではないだろうか。

観光客がちょっと道に迷っているような素振りを見せると、通りすがりの人が必ず声をかけて教えてくれるのがウィーン気質。楽聖たちのお墓を一カ所にまとめてある中央墓地に初めて行った時のこと。駅は間違えずに降りたのだが墓地は思ったより広大。陽も暮れかかっていたため、帰れなくなっても困ると思い、門から少し入った所で諦めた。それで引き返そうとしたらシューベルトと刻まれた真新しい墓があるではないか。もちろん大作曲家の墓でないことはわかっていたが、せっかく近くまで来たのだから代わりに撮っておこうと、冗談半分にカメラを向けた。すると中年の女性が近寄ってきて「これは違いますよ。フランツのはあっちです」と、その場所まで案内してくれたのだ。

現在のウィーンが観光収入に大きく依存しているという事情が絡んでいるのは確かだが、多くの人がホテルマンよりも自然なマナーで振る舞えるというのは、やはり街の歴史が大きく関わっているからだと思われる。

オーストリア=ハンガリー帝国の帝都として栄華をきわめたウィーンには、多くの音楽家たちが集まった。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、ブルックナー、マーラーらがすぐに思い浮かぶが、彼らは皆、外から来た人たちである。そのクラスの大作曲家でウィーン生まれなのは、シューベルトとシェーンベルクぐらい。外に向かって門戸を開き、有能な才能を迎え入れた結果として『音楽の都』になったわけだが、その『温かく迎える姿勢』こそがウィーンの歴史を築き、ハプスブルク家の庇護のもと、18~19世紀を頂点として音楽文化の華を咲かせた。それがそのままウィーン・フィルのまろやかな響きとして結実しているように思える。

伝統的なスタイル

ウィーン・フィルは自分達の伝統を守ろうとする意識が強く、それが指揮者の癖や特徴を中庸化する。その典型がゲオルグ・ショルティだった。ロリン・マゼール等が言うように「指揮は手首」がポイントで、普通、指揮は棒を握った拳あたりを中心に図形を描くものだが、ショルティは「ひじ」だと言う。実際、そのアクションを見ていると、肘鉄を喰らわすような痙攣的な動作が特異な印象をあたえる。しかも、ゆったりと静かに進行してゆくような場合でも、肘鉄が唐突な感じで炸裂するのだ。



モーツァルトの格好をしたチケット売り。ウィーンにて。

ベームの追悼演奏会をショルティが振った際の《トリスタンとイゾルデ》の前奏曲が面白かった。能みtainな静謐な音楽が続く開始部を、ショルティはいつものとおり、間歇泉的に肘鉄を交えたアクションで指揮。画面からは、その痙攣的な動作に不快感を示す聴衆の姿も散見された。ところがウィーン・フィルは、肘鉄の不規則な凹凸には全く反応せず、滑らかな曲線を描き続けていたのである。

棒に瞬間的に食らいつくのではなく、指揮者のアクションを起点に舞台上に生じた意識空間を全員が感じ取り、その共通認識にシンクロさせて伝統的な味付けを加えながら演奏を進めていくのがウィーン・フィル流の音楽作りなのだ。そこに、微妙なゆとりと温かみが生れる。

それこそがウィーン・フィルの魅力なのだが、普段はニュアンス的にしか感じられないその時間の『のりしろ』が、表に出てきてしまう場合もある。ベーム最後の来日公演となった1980年のベートーヴェンは、その典型だった。

ベームの場合、ショルティの「肘」に該るのが「腰」。先ず腰が先に動き、それが身体全体のアクションを伴って棒に伝わりと



アルノルト・シェーンベルク
(1874~1951)
ウィーン生まれの作曲家。ベルクや
ウェーベルンとともに「新ウィーン楽
派」を形成し、新しい作曲技法を作
り出した。代表作に《月に憑(つ)か
れたピエロ》などがある。

ズービン・メータ (1936~) のレコーディング風景。

インド生まれの名指揮者で、デビューまもないころからウィーン・フィルとた
びたび共演。その堅実かつ躍動感あふれる指揮は、楽員からの信頼も厚い。
1998年から2006年までバイエルン州立歌劇場の音楽総監督に就任した。



© UNIVERSAL MUSIC LLC

いった感じなのだ。立って指揮していた時も、それが独特の遅延
回路となって、重厚な響きを生み出していたのだが、80年の時は
座って振っていたので、そのディレイ回路の仕組みが現象として
表面に晒されることになった。

座っていても、バームの腰は瞬間的に少し浮き、身体が沈むの
に連動して棒も振り下ろされる。しかし、音は全く出ない。その
アクション全体を把握したコンサートマスターのヘツツェルが弓
を動かすと、そこで初めてウィーン・フィル独特の重厚で包み込
むようなトゥッティが鳴り響くのである。やはり棒の動きが独特
だったフルトヴェングラーのエピソードに、こうした類の逸話が
沢山出てくるが、カルロ・マリア・ジュリーニが実際に振った時
の体験をこう述べている。「オーケストラがストライキをしてい
るのかと思ったよ」。

ニューイヤー・コンサート

ニューイヤー・コンサートを見ていると、こうした指揮者への
対応ぶりが、よく分かる。近年のハイライトはカルロス・クライ
バー。ウィーン・フィルの自発性に音楽を委ねながら、棒やアク
ションは、それを流線的な動きとして、視覚的に映し出す。C.ク
ライバーのように優雅ではないがジョルジュ・プレートルも、予想
外にウィーン・フィルの音楽とマッチしていた。

一方、メータ、小澤、ニコラウス・アーノンクール、ダニエ
ル・バレンボイムといったあたりは、世代的にリアルタイムな瞬
時の反応を要求する棒を振っているせいもあって、『棒の動きは
硬めで鋭角的だが、ウィーン・フィルは自分達の流儀で、丸みを
付ける』といった形になってくる。そのあたりを観察するののも一

興であろう。

このニューイヤー・コンサート、最後はアンコールとして《美
しく青きドナウ》と《ラデツキー行進曲》で締め括られるのが通
例。その前に指揮者が新年の挨拶するのも恒例となっているのだ
が、カラヤンが1度だけ振った1987年には予想外のハプニングが
起こった。

その時は、恒例の2曲の前に、アンコールでもう1曲、テンポ
の速いポルカを先に演奏する手順になっていたのだが、カラヤン
はそれを忘れたらしく、〈ドナウ〉と信じ込んで優雅に棒を振り下
ろした。いや、正確には、柔らかに棒を宙に浮かべたと言うべきか。

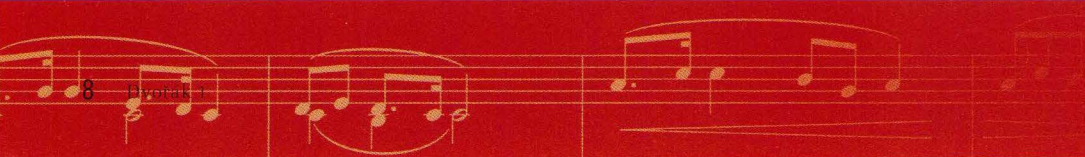
通例なら、ヴァイオリンがさざ波のようなトレモロを弾き始め、
それを聴いた聴衆が拍手で中断、指揮者が「ウィーン・フィルと
私は、皆様に新年のご多幸をお祈りします」とドイツ語で挨拶。
しきり直しの形でトレモロが再スタートすることになる。

この時、ウィーン・フィルは景気の良い2拍子のつもりで勇ん
で身構えていたわけだから、〈ドナウ〉冒頭のためのビート感の
無いアクションでは、音の出しようが無かったのは確かだ。

これが、もう少しレベルの低いオケだったら、一人や二人、間
違って飛び出しても仕方がないような状況だったはずなのだが、
このあたりの対応は、流石、気配で先を読むウィーン・フィル。
恐らく全員が、指揮者の動作から、勘違いしていることを瞬時に
察したのであろう。音は全く出なかった。

気づいたカラヤンは、ニヤッと笑って、おもむろに速い2拍子
を振り直し、何事も無かったかのようにコンサートは終結に向か
ったのである。ニューイヤー・コンサートで、最もウィーン・フィ
ルらしさを感じた一駒だった。

ウィーン・フィルを聴く②は42巻に掲載予定です。





©UNIVERSAL MUSIC LLC

カルロス・クライバー指揮のニューイヤー・コンサート(1989年)。その名声に比して極端に録音が少なく、演奏会もたびたびキャンセルすることで知られる「幻の指揮者」クライバーが、89年、92年の2回ニューイヤー・コンサートに登場し、話題になった。



♪基礎から学ぶクラシック講座

作曲家の肖像

Antonín Dvořák
アントニン・ドヴォルザーク
(1841~1904)

Dvořák ドヴォルザーク (1)

作曲家をめざすプラハの町楽士

——今日こそこれを書き上げよう。

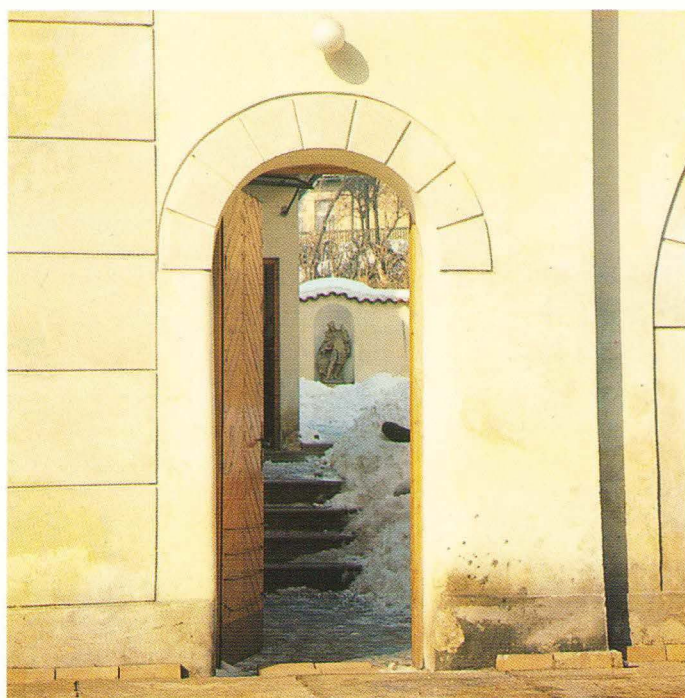
貧しい生活のかたわら、

若きドヴォルザークは作曲に励んだ。

文=ひのまどか (音楽作家)



38歳のドヴォルザーク



ネラホゼヴェス村にあるドヴォルザークの生家の入り口。

1861年プラハのクリスマス

12月に入るとプラハの旧市街広場には、クリスマスの市が立ちます。天使や聖人たちの人形を売る小さな出店や、聖人画をところせましと貼りつけた小屋、アメ玉や菓子売る屋台、オレンジやリングを盛り上げた屋台などが広場を埋めつくし、買い物客やひやかし客は、粉雪が舞う中で笑いながら一軒一軒のぞいています。誰もが幸せそうです。

20歳のアントニン・ドヴォルザークは、ヴィオラのケースを抱えて広場を横切るのに苦労していました。人波が四方から押しよせてきて、思わぬ方向に流されてしまいます。

「失礼、失礼、ちょっと通してください」

小声で謝りながら人をかき分けかき分け進んでいた彼は、ひとつの屋台の前で足がくぎ付けになってしまいました。木やブリキのおもちゃをいっぱい並べた台の真ん中に、黒光りする小さな蒸気機関車があったのです。

——すごい！

彼は思わずそれを手に取りました。

「良くできているなあ、これはガラット型だ」

彼は鉄道マニアでした。9歳のときに故郷のネラホゼヴェス村で初めて蒸気機関車を見て以来、煙を吐きながら突進するこの鉄のかたまりの虜^{とりこ}になってしまったのです。プラハに出てきてからも、時間があれば中央駅に機関車を見に行っています。

——買いたい、でもとっても手が出ない。

いつものことながらポケットには数枚の小銭しかなく、お腹は空きっぱなしです。20歳の貧しい楽士に、おもちゃを買うような贅沢^{すいさ}は許されません。ドヴォルザークはうらめしげに機関車を台の上に戻すと、仕事に遅れないように急いで人ごみを抜け出し、雪が積もり始めた石畳の路地を駆け抜けて石炭市場の先にある「三匹の金獅子^{きんじし}の家」に飛びこみました。この宿屋兼居酒屋が、今夜の彼の仕事場です。

プラハには「金」の付く名の宿屋や居酒屋がいっぱいあります。「金の梨」「金の羊」「金の星」「金の足」……、しかしそこで働く楽士たちは、お金にいちばん縁がないのです。

ドヴォルザークの同僚のカレル・コムザーク楽団の面々がやってきて、すぐに演奏が始まりました。泡立つビールと山盛りのソ

ーセージの皿を前にした客たちは、楽団の演奏に合わせて一晩じゅう歌ったり踊ったりするのです。

ドヴォルザークは、町楽士の仕事になんの不満もありませんでした。それどころか、プラハでいちばん人気のあるこの楽団に入れて運が良かったと思っています。彼は2年前にプラハのオルガン学校を卒業しましたが、教会オルガニストの仕事がすぐにあるわけではなく、スタヴォフスケ劇場のオーケストラにも空席がなかったので、危うく路頭に迷うところでした。そんなことになったらせっかくプラハに出してくれた父親に顔向けができません。本来ならば、長男の彼は家業の精肉商をついで、両親と6人の弟妹たちの面倒を見なければならない立場にあったのです。

独学で勉強した音楽

彼はヴィオラを弾きながら客たちのあいだを回り、自分も楽しんで“ポルカ”や“フリアント”（どちらもチェコの舞曲）を奏でました。

「この若いヴィオラ弾きは、愛想はないが音楽ときたら絶品だ」

喜んだ客たちは、彼のポケットにチップを入れてくれます。今

プラハの旧市街広場。中央はチェコの民族的英雄フス（1370頃～1415、宗教改革者）の像。



夜もそうした小銭と、親方からもらったわずかな日銭で夕食代が稼げました。深夜仕事を終えた彼は、屋台のソーセージと黒パンで腹を満たし、間借りしている父方の親戚の家に戻って、寝ている小さな子供たちを起こさないように自分のベッドにたどり着きました。

これからが、彼の本当の時間なのです。

——今日こそこれを書き上げよう。

大切に取ってあるロウソクに火をともし、それ以上に貴重な五線紙を取り出すと、ドヴォルザークはベッドの横の小机で作曲を始めました。作曲の基礎はオルガン学校で習いましたが、彼が書きたいのはピアノやオルガンの小曲ではなく、**弦楽四重奏曲や交響曲**です。手本は、金持ちの友人カレル・ベンドルが貸してくれたモーツァルトやベートーヴェンの楽譜でした。それらを自分で書き写しながら、ドヴォルザークは独学で作曲の猛勉強を重ね、自分で曲を書くまでになったのです。

アイディアは昼間から山ほど蓄えてあるので、探すのに苦労はありません。ピアノを借りる金はないので、頭の中で組み立ててある音をいっしょに書き下ろすのです。しかしあとで見直してみる

といかにも幼稚な作品に思えて、恥ずかしさのあまり破り捨ててしまうのでした。

——どうすればうまくまとめられるかわからない。やはり実際に交響曲を聴いてみなければ、どんなふうに鳴るのかわからない。

とはいえ音楽会に行けるのは、たまに同僚の厚意で劇場にもぐりこませてもらえるときくらいです。そうしたチャンスには、砂が水を吸い取るように楽器の使い方や効果を学び取り、自分の曲にも応用してみます。彼にとっては、音楽の現場が教師でした。

プラハの旧市街の片隅で若い楽士がこれほどの努力を重ねているということを、このとき誰も知りませんでした。

国民劇場の創立

1862年、プラハ市民は喜びに沸き立っていました。ヴルタヴァ（ドイツ語ではモルダウ）川のほとりに「チェコ語のオペラ上演のための」国民劇場が建ったのです。資金は、国中の人から寄せられたカンパでした。

これは、民族独立運動の華々しい成果でした。ボヘミア（現

ヴルタヴァ川のほとりに建つ国民劇場。屋根の一段低い部分が、かつての仮劇場。ドーム状の屋根の部分が増築され現在の姿となった。





在のチェコの西半分)は、17世紀初めにオーストリアに支配されて以来、強力なドイツ化政策を敷かれてチェコ語の使用を禁じられていました。

「誰だって自分の国の言葉を話したい」

「チェコ人なんだからチェコ語で演劇やオペラをやりたい」

そうした当然の願いはすべて押しつぶされ、全国民はドイツ語を話すように強要されていました。ネラホゼヴェス村で生まれ育ったドヴォルザークでさえ、精肉商になるにしろ、オルガニストになるにしろ、ドイツ語を話すことが絶対条件で、そのためあちこちに勉強にやらされていたのです。彼は、ドイツ語が苦手な満足に話せなかったため、プラハのオルガン学校に入ってから笑いのものにされていました。

しかし今や、その価値観が逆転したのです。これは、フランス革命に刺激された国々で次々に革命が起きているのを見たオーストリアが態度を変え、チェコ人の自由を大幅に認めたからでした。

「とにかく一刻も早くチェコ人のための劇場を建てよう」

「そこを独立運動のシンボルにしよう」

「本格的な劇場はあとから^{とっかん}つくり建てればいい」

というわけで、半年間の突貫工事で建った劇場は、本物の国民劇場ができるまでの仮の建物の意味で、「仮劇場」と名付けられました。

このことが、ドヴォルザークの生活を大きく変えました。カレル・コムザーク楽団が、仮劇場のオーケストラの中に組み込まれたからです。町楽士たちにとっては大変な出世でした。

「これでわしの楽団がどんなに優秀かわかっただろう」

楽団を育てたコムザーク親方は鼻たかだかでしたが、もっと誇らしかったのはドヴォルザークです。なにしろ2人しか採らないヴィオラ奏者の1人に選ばれたのですから。

——これで毎晩オペラの勉強ができる。交響曲の次にはオペラを書かなくてはと思っていたぼくにとっては、最高の職場だ！

敬虔なキリスト教徒の彼は、深く神に感謝しました。

スメタナとドヴォルザーク

このとき1人だけ、失意に沈んでいた音楽家があります。スメタナです。

スウェーデンで指揮者・ピアニストとして活躍していた彼は、仮劇場の建設を知り、5年半のスウェーデン生活を切り上げて祖国に帰ってきました。外国で名声を得ていた彼は、当然自分が仮劇場の指揮者に指名されると思っていた。

しかし、思いもかけない壁がありました。「言葉の壁」です。ドイツ語しか話さない上流家庭で育ったスメタナは、チェコ語がほとんど話せなかったのです。いっぽう、仮劇場を運営す



チェコ音楽の基礎を築いたスメタナのオペラ《売られた花嫁》。

る人たちは民族運動の先頭に立つ人たちでした。

「チェコ語も話せない人間が、なんでチェコ人のための劇場に入れるか」

皮肉な運命の巡り合わせでこれまでの経歴をすべて否定されたスメタナは、失意の中で民族意識に目覚め、30歳代の終わりにしてチェコ語の猛勉強を始めました。やがて人々の耳に、

「スメタナがチェコ語のオペラを書いている」

という噂が入ってきました。

国中の人が期待しました。

そして1866年、スメタナは2つのチェコ語のオペラ《ボヘミアにおけるブランデンブルクの人々》と《売られた花嫁》で、みごと名誉挽回を果たし、晴れて仮劇場の指揮者に迎え入れられたのです。

——オペラというのは国民のための仕事なんだ。ぼくもいつかは書きたい。スメタナのようにになりたい。

25歳になったドヴォルザークは、尊敬するスメタナの足元で夜ごと黙々とヴィオラを弾きながら、オペラを書くことを夢見ていました。この無口でおとなしい青年は、人知れず2つも交響曲を書いていましたが、それをスメタナに見せて助言を求める勇気はありませんでした。彼は積極的に運命を切りひらくタイプではなかったのです。しかしその特別の楽才は、いずれ人の目にとまらずにはいけませんでした。

ドヴォルザーク②は19巻に掲載予定です。



ドヴォルザークの交響曲第9番《新世界より》が初演されたカーネギーホール（ニューヨーク）。

曲の情景

♪基礎から学ぶクラシック講座

アメリカとボヘミアの大地に 育まれた名曲

スラヴ舞曲集

第1番 第3番 第8番

第10番 第16番

交響曲 第9番 《新世界より》

文=ひのまどか（音楽作家）

ドヴォルザークの故郷
ネラホゼヴェス村を走
る鉄道と駅。彼は蒸気
機関車が大好きだった
という。



スラヴ舞曲集

第1番 八長調 (作品46-1) 第10番 ホ短調 (作品72-2)
第3番 変イ長調 (作品46-3) 第16番 変イ長調 (作品72-3)
第8番 ト短調 (作品46-8)
(CD 5 ~ 9)

1874年秋、ウィーンの芸術家会館の一室で数人の紳士が山積みされた楽譜を片っ端から手に取り、目を通していました。

「毎年応募者は増えるいっぽうなのに、これといった才能は出てこない」

「この奨学金制度も発足して11年がたつが、まだあまり成果はないな」

紳士たちが審査しているのは、オーストリア政府が「若く貧しく才能ある芸術家」の発掘のために設けた奨学金への応募作品でした。審査員の中には、手きびしい音楽批評で恐れられているハンスリック教授と、ウィーン宮廷歌劇場の総監督ヘルベックがいました。

しかしこの日、2人は喜びの声をあげました。

「この作品は非常に良く書けている」

「久々に出了た本物の才能だ！」

それは、プラハのアントニン・ドヴォルザークという無名の作曲家が送ってきた交響曲でした。審査員たちは全員一致で、彼を選びました。

この年、ドヴォルザークは33歳になっていました。創作のため国民劇場のオーケストラは3年前にやめて、今は聖ヴォイチェフ教会のオルガニストとピアノ教師でなんとか食べています。でも彼は幸せでした。新婚ほやほやのうえに、男の子が生まれたばかりだったのです。新妻はかつての教え子で20歳になるアンナでした。

こうした生活の中で彼は精力的にオペラや交響曲や合唱曲を書き、プラハではようやく名前を知られるようになっていました。しかし相変わらず謙虚で自己批判が強いため、なかなか自分を売り込めません。オーストリア政府の奨学金に応募したのも、指揮者になった友人のカレル・ベンドルに強く勧められたからでした。それでもドヴォルザーク自身は、自分が審査員の目にとまるとは思ってもいなかったのです。

翌年1月7日、ドヴォルザークのもとに合格通知が届きました。奨学金は、今の仕事（オルガニスト）の年俸の4倍近い400グルデン。彼が初めて手にする大金です。生活の心配からいっきに解放された彼は、毎年ウィーンにたくさんの作品を送り、連続5年、奨学金をもらうことになります。しかし彼の知らないところで、運はさらに開けていました。

「ウィーンの大家」ブラームスも、ドヴォルザークの作品に注目していたのです。ブラームスは慎重に2年間この若手の（といっても2人の年の差は8年しかないのですが）成長を見とどけて、「非常に才能がある」と確信し、ベルリンで大手楽譜出版社を経営するフリッツ・ジムロックに手紙で推薦しました。

『あなたはドヴォルザークの《モラヴィア 二重唱曲》を出版することに大きな喜びを持たれるでしょう。彼は間違いなく優れた才能の持ち主です。しかし貧乏です。どうかこれらのことをよくお考えください』

商売人のジムロックは、楽譜をひと目見て「これは売れる！」と直感し、そして出版された《モラヴィア 二重唱曲》は大評判をとりました。そこでジムロックは、すぐに直接ドヴォルザーク



ドヴォルザークがオルガニストを務めていた聖ヴォイチェフ教会（プラハ）。



曲の情景

Antonín Leopold Dvořák

に新作を注文しました。

「ブラームスの《ハンガリー舞曲》のような作品を書いてみませんか？」

ピアノ連弾用に書かれた《ハンガリー舞曲集》は大ヒットして、ブラームスの名を一躍有名にしていました。ドヴォルザークは喜んでこの仕事を引き受け、1878年の3月から2ヵ月もかけずに楽々と8曲の《スラヴ舞曲集》を書き上げました。最初はピアノ連弾用に、つづいてオーケストラ用に編曲された《スラヴ舞曲集》は、空前の大ヒット作となり、ドヴォルザークには世界的名声を、ジムロックには大金をもたらしました。抜け目のないジムロックは、これを《スラヴ舞曲》第1集としてすぐに第2集を企画しましたが、今や有名作曲家になったドヴォルザークのもとには注文が殺到していたため、第2集の8曲の完成は、8年後の1886年に持ち越されました。

全16曲の《スラヴ舞曲集》は、チェコやスロヴァキアやウクライナなどのスラヴ民族の踊りのリズムに、ドヴォルザークの創作による魅力的なメロディーを組み合わせた生命力溢れる作品です。美しい自然に恵まれたネラホゼヴェス村で育ったドヴォルザークには、風や、木々のざわめきや、小鳥のさえずりや、村人たちの生活の音を音楽として聴き取る耳が備わっており、その音楽が生きる喜びに満ちたこの舞曲集となって実を結んだのでした。



テキサスのネイティブ・アメリカンの祭りの様子。

交響曲 第9番 木短調 作品95 《新世界より》

(CD①～④)

コロンブスが新大陸を発見したのは1492年です。1600年代に入るとヨーロッパ各国からの移民が各地に植民地を建設して、どこも急速に町や都会に発展してゆきました。1776年、イギリスからの独立宣言によって合衆国となったアメリカは、1890年代には世界有数の工業国に成長していました。

衣食住が足りたところで次に人々が求めるのは精神的な糧、つまり文化です。

摩天楼が建ち並ぶ大都市ニューヨークに集まったミリオネア（百万長者）たちは、文化面でもヨーロッパに負けじと巨額の富を投じてオペラ劇場やコンサートホール、美術館を造りました。銀行王ロックフェラーや鉄道王ヴァンダービルドは1883年にメトロポリタン歌劇場を、鉄鋼王カーネギーは1891年にカーネギーホールを、という具合に。

「でもそこで演奏されるのはドイツやイタリアの音楽ばかり。アメリカは誕生してからもう100年以上たっているのに“これがアメリカの音楽です!”と誇れるものを持っていないじゃない。これではいつまでも文化的には植民地のままだわ」

と嘆いていたのは30歳代の美しいジャネット・サーバー夫人でした。夫人はかつてピアノ教師をしていましたが、今は大金持ちの商人と結婚して大金を使える立場にいます。彼女はそれを音楽教育のために使おうと決めました。

1885年、ニューヨークの東17丁目に「ナショナル音楽院」を創設した彼女は、若い作曲家を育ててくれる優れた指導者を探していました。その彼女の目にとまった人物が、ボヘミアの作曲家、ドヴォルザークです。「オーストリアに支配されている国で、自分たちチェコ民族の音楽を創造したドヴォルザークこそ、院長に最もふさわしい人だわ!」。

1891年4月、ブラハのドヴォルザークのもとにサーバー夫人からの手紙が届きました。『ニューヨークのナショナル音楽院の院長として、アメリカ国民音楽の創造に手を貸していただけませんか。年俸は15,000ドル、休暇は年に4ヵ月、日に3クラスの授業と学生オーケストラの指導、年10回の自作のコンサートの指揮、これが条件のすべてです』。

ドヴォルザークは50歳になろうとしていました。名声はヨーロッパじゅうにとどろき、勲章や名誉博士号が次々に授与されて、まさしくボヘミアを代表する作曲家になっていました。

彼は迷いに迷いました。

——そんなに長いあいだ祖国を離れていられるだろうか。船の旅は安全だろうか。6人の子供たちはどうするのか。



正面が現在のメトロポリタン歌劇場。左が州立劇場、右がエイブリー・フィッシャー・ホール（ニューヨーク）。

考えただけでホームシックになってしまいます。しかし、15,000ドルという年俸はいかにも魅力的でした。それは就任したばかりのプラハ音楽院作曲科教授の年俸の約12倍（3万グルデン）にもなります。彼は質素な生活を好んでいますが、老後や子供の教育のことは心配です。

——このチャンスにお金を蓄えておきなさいと神様がおっしゃっているのかもしれない。

半年以上も考えたすえ、彼はサーバー夫人と2年間の契約を結んだのでした。

1892年9月27日、妻と上の2人の子供と教え子1人を伴ったドヴォルザークは、「コロンブス新大陸発見400年祭」に沸くアメリカに到着しました。歓迎行事がめじろ押しでしたが、10月半ばに一家はようやく音楽院の近くの家に落ち着き、院長の仕事がスタートしました。

音楽院には、白人だけではなく黒人の学生もたくさんいます。ドヴォルザークは彼らが歌う黒人霊歌（ニグロ・スピリチュアル）を聴いて、新鮮なおどろきに打たれました。また、ネイティヴ・アメリカン（先住民インディアン）の音楽や、フォスターの歌に

も強く心を引かれました。

彼は学生たちに言いました。

「アメリカにはこんなに素晴らしい音楽の宝がある。君たちはここからインスピレーションを得るべきです」

ドヴォルザーク自身もこれらアメリカの大地から生まれた音楽に刺激されて、新しい交響曲の作曲に取りかかりました。1893年の1月から5月にかけて書かれた交響曲第9番《新世界より》がそれです。これは彼がアメリカで書いた最初の作品でした。《新世界より》は、新世界アメリカを見た感動と、祖国ボヘミアへの愛を歌った音楽です。彼自身「これは祖国への愛を表したチェコの音楽ですが、もしアメリカに来なかったならばこうした音楽にはなかったでしょう」と語っています。

いたるところに現れる美しいメロディーは、黒人霊歌やネイティヴ・アメリカンの音楽をそのまま使ったのではなく、あくまでもドヴォルザークの作曲です。とりわけ第2楽章のメロディーは、彼の弟子の1人が《帰郷》（日本では《家路》）という歌に編曲したため、有名になりました。全部で4つの楽章を持った約45分の作品です。

ベルリン・フィル

P.2

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団。ドイツの首都ベルリン（旧西ベルリン）にあるコンサートホール、「フィルハーモニー」を本拠地とするオーケストラ。1882年、ベンヤミン・ビルゼが運営するオーケストラのメンバー数十人が独立し、自主運営の楽団を設立したことからその歴史が始まる。1887年、ハンス・フォン・ビューローが常任指揮者となって以降急速に評価が高まり、現在も世界有数のオーケストラとしてその名が知られている。2002年よりクラウディオ・アバドの後任としてサー・サイモン・ラトルが芸術監督兼首席指揮者に就任。

カンタービレ

P.5

イタリア語、cantabile。楽曲を演奏する際の表現方法を示す音楽用語、「発想標語」のひとつで、「歌うように」の意。また、名詞ではカンタービレ調（の曲）という意味をもつ。

ブラスセクション

P.5

オーケストラのなかで、トランペット、トロンボーン、ホルンなど金管楽器で構成される部分を指す。ブラスとは真鍮のこと。管楽器のうち、材質に真鍮が用いられている金管楽器をブラスと呼ぶ。ただし、同じように真鍮が使われているフルートやサクソフォンは発声原理が異なるため、木管楽器に分類される。

ポルカ

P.11

速い2拍子のリズムに特徴のあるチェコの民俗舞曲。1830年頃にボヘミアに現れ、19世紀後半まで流行。スロヴァキア、ポーランドをはじめ世界中に広まり、舞踏会やダンスホールに欠かせない存在となった。ヨハン・シュトラウス1世、ヨハン・シュトラウス2世が多数のポルカを書き残すほか、スメタナ、チャイコフスキーらもポルカのリズムを取り入れた作品を残している。

スタヴォフスケ劇場

P.11

ブラハでオペラを専門に上演する3つの劇場のうちのひとつ。1783年に開場された歴史と伝統を誇る劇場で、開場から4年後の1787年10月29日には、モーツァルト自身の指揮で《ドン・ジョヴァンニ》が初演されたといわれる。また、1791年、彼の最後のオペラとなる《皇帝ティートの慈悲》が初演されるなどモーツァルトゆかりの劇場としても名高い。現在でもモーツァルトの作品を中心に上演している。

フリアント

P.11

ポルカと同じくチェコの民俗舞曲で、2拍+2拍+2拍+3拍+3拍という基本リズムをもつ。鋭いアクセントと急速なテンポによって、力強く勢いのある曲想となる。ドヴォルザークの《スラヴ舞曲集》の第1番 ハ長調（作品46-1）と第8番 ト短調（作品46-8）にフリアントが使われている。

弦楽四重奏曲

P.12

弦楽四重奏とは、一般的には2本のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの計4つの弦楽器で演奏する形態を指す。弦楽四重奏曲とは、弦楽四重奏による楽曲のこと。18世紀後半、ハイドンが数多くの弦楽四重奏曲をつくることで、この曲種の本質を決定づけた。多くは4楽章から構成され、第1楽章がソナタ形式（序奏+提示部+展開部+再現部+終結部）となる。

交響曲

P.12

18世紀中頃に成立した、管弦楽のための大規模な楽曲。4つの楽章によって構成されるのが基本で、少なくともひとつのソナタ形式の楽章を含むことが定義とされる。交響曲の父と呼ばれるハイドンは、第1楽章=管弦楽によるソナタ形式、第2楽章=緩徐楽章（ゆったりしたテンポの楽章）、第3楽章=メヌエット、第4楽章=ソナタ形式またはロンド形式、というスタイルを確立した。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

1842年3月28日、のちにウィーン国立歌劇場となるケルントナートーア劇場のオーケストラ団員を中心とした音楽家たちにより、第1回フィルハーモニー演奏会が開催された。指揮はケルントナートーア劇場の楽長であり、作曲家でもあったオットー・ニコライ。この演奏会が、世界最高のオーケストラ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の発祥とされる。

設立当初から何ものにも帰属せず、自主独立の精神と民主的運営という原則を確立していたこのオーケストラは、ウィーンを本拠地としてブラームスやマーラーといった作曲家たちとともに活動、クラシックの伝統を培ってきた。

ウィーン・フィルのメンバーとなるには、まず、ウィーン国立歌劇場管弦楽団のオーディションに合格し、最低3年間は、歌劇場管弦楽団の団員としてその力を実証しなくてはならない。その後、はじめてメンバーとなる資格を得ることができる。そんなエリートたちが指揮台に迎えるのは、やはり第一級の指揮者のみ。1933年より、常任指揮者制度が廃止され、公演ごとにメンバーが指揮者を選出するシステムとなっている。

現在は、ウィーン楽友協会大ホール（ムジークフェラインザール）での定期演奏会、世界各地での音楽祭への参加に加え、レコーディングや映像収録などさまざまな活動を展開。同時に音楽とは不可分の平和、人道、和解を伝えるメッセンジャーとしての役割も担い、数々の業績を残しつつづけている。





ウィーン・フィル 魅惑の名曲

The Wonderful Sounds of Wiener Philharmoniker

**2010年1月19日(火) 創刊
隔週火曜日発売**

第2巻より各巻価格1,190円

(1号のみ特別価格690円)

A4変型 オールカラー マガジン 20ページ+12cmCD

小澤征爾、カラヤン、バーンスタイン、ベーム、アバド……といった錚々たる指揮者の珠玉の演奏を収録

冊子には、楽団の背景、指揮者の素顔、楽曲・作曲家の情報を連載し、CD鑑賞がいっそう楽しめます

50巻を通して、日ごろ、演奏会、CM、学校教育で耳なじみのある楽曲が、極上の演奏で手に入ります

©FAYER, Wien / DG

CDつきマガジン

ウィーン・フィル 魅惑の名曲 〈全50巻〉全巻収録曲

P=ピアノ Or=オルガン Vn=ヴァイオリン
Vc=チェロ S=ソプラノ Ms=メゾ・ソプラノ
T=テノール Br=バリトン

- vol.1 **ドヴォルザーク 1** 1月19日(火) 発売
- 交響曲 第9番 ホ短調 作品95《新世界より》
 - スラヴ舞曲集 第1・3・8・10・16番
- 小澤征爾/アンドレ・プレヴィン (指揮)

- vol.2 **チャイコフスキー 1** 2月2日(火) 発売
- バレエ組曲《白鳥の湖》 作品20
 - バレエ組曲《くるみ割り人形》 作品71a
 - バレエ組曲《眠れる森の美女》 作品66
- ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)

- vol.3 **モーツァルト 1** 2月16日(火) 発売
- 交響曲 第40番 ト短調 K. 550
 - セレナーデ 第13番 ト長調 K. 525
《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》
 - 交響曲 第35番 ニ長調 K. 385《ハフナー》
- カール・ベーム (指揮)

- vol.4 **ベートーヴェン 1** 3月2日(火) 発売
- 交響曲 第3番 変ホ長調 作品55《英雄》
 - 序曲《コリオラン》 作品62
- レナード・バーンスタイン (指揮)

- vol.5 **モーツァルト 2**
- 交響曲 第41番 ハ長調 K. 551《ジュピター》
 - 歌劇《ドン・ジョヴァンニ》 K. 527～序曲
 - ピアノ協奏曲 第20番 ニ短調 K. 466
- カール・ベーム/クラウディオ・アバド (指揮)
フリードリヒ・グルダ (P)

- vol.6 **ベートーヴェン 2**
- 交響曲 第5番 ハ短調 作品67《運命》
 - 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68《田園》
- ハンス・シュミット＝イッセルシュテット (指揮)

- vol.7 **メンデルスゾーン/チャイコフスキー**
- ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64
 - ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35
- クラウディオ・アバド (指揮)
ナタン・ミルシテイン (Vn)

- vol.8 **ホルスト/グリーグ**
- 組曲《惑星》 作品32
 - 《ペール・ギュント》の音楽
- ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)

- vol.9 **チャイコフスキー 2**
- ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23
 - 幻想序曲《ハムレット》 作品67
- サー・ゲオルグ・ショルティ/ロリン・マゼール (指揮)
サー・クリフォード・カーゾン (P)

- vol.10 **ブラームス 1**
- 交響曲 第4番 ホ短調 作品98
 - 《悲劇的序曲》 作品81
- イシュトヴァン・ケルテス/
ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)

- vol.11 **シューベルト 1**
 ●交響曲 第7番 (旧第8番) ロ短調 D. 759《未完成》
 ●交響曲 第5番 変ロ長調 D. 485
 カール・ベーム (指揮)

- vol.12 **チャイコフスキー 3**
 ●交響曲 第6番 ロ短調 作品74《悲愴》
 ●幻想序曲《ロメオとジュリエット》
 ロリン・マゼール (指揮)

- vol.13 **スメタナ**
 ●連作交響詩《わが祖国》
 ラファエル・クーベリック (指揮)

- vol.14 **ベートーヴェン 3**
 ●ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73《皇帝》
 ●《レオノーレ》序曲 第3番 ハ長調 作品72a
 ハンス・シュミット＝イッセルシュテット (指揮)
 ヴィルヘルム・バックハウス (P)

- vol.15 **ブラームス 2**
 ●交響曲 第1番 ハ短調 作品68
 ●《ハイドンの主題による変奏曲》 作品56a
 レナード・バーンスタイン (指揮)

- vol.16 **R・シュトラウス 1**
 ●交響詩《ツァラトストラはかく語りき》 作品30
 ●《7枚のヴェールの踊り》(楽劇《サロメ》 作品54より)
 ●交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》 作品28
 ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)

- vol.17 **ベルリオーズ／ウェーバー**
 ●《幻想交響曲》 作品14
 ●《舞踏への勧誘》
 ベルナルト・ハイティンク／ホルスト・シュタイン (指揮)

- vol.18 **ブラームス 3**
 ●《大学祝典序曲》 作品80
 ●ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品83
 ●ハンガリー舞曲集 第1・5・6番
 ハンス・クナッパースブッシュ／カール・ベーム／
 フリッツ・ライナー (指揮)
 ヴィルヘルム・バックハウス (P)

- vol.19 **ドヴォルザーク 2**
 ●チェロ協奏曲 ロ短調 作品104
 ●交響曲 第8番 ト長調 作品88
 アンドレ・プレヴィン／小澤征爾 (指揮)
 ハインリヒ・シフ (Vc)

- vol.20 **ヴェルディ**
 ●歌劇《アイーダ》～ハイライツ～
 ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)
 レナータ・テバルディ (S) カルロ・ベルゴンツィ (T)

- vol.21 **ムソルグスキー／ラヴェル**
 ●組曲《展覧会の絵》
 ●《ラ・ヴァルス》
 アンドレ・プレヴィン (指揮)

- vol.22 **モーツァルト 3**
 ●《レクイエム》ニ短調 K. 626
 カール・ベーム (指揮) ハンス・ハーゼルベック (Or)
 ウィーン国立歌劇場合唱団

- vol.23 **ヤナーチェク**
 ●《シンフォニエッタ》
 ●《タラス・ブーリバ》
 サー・チャールズ・マッケラス (指揮)

- J.S.バッハほか**
クリスマス曲集
 vol.24 ●《高き天より》 ●《アヴェ・マリア》 ●《清しこの夜》
 ●《アレリヤ》 ●《オ・ホーリー・ナイト》 ほか全13曲
 ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)
 ウィーン楽友協会合唱団

- vol.25 **ベートーヴェン 4**
 ●交響曲 第9番 ニ短調 作品125《合唱》
 カール・ベーム (指揮)
 ウィーン国立歌劇場合唱団

- シュトラウス・ファミリー 1**
ニューイヤー・コンサート
 vol.26 ●ワルツ《美しき青きドナウ》 作品314
 ●喜歌劇《こうもり》 序曲
 ●《ピチカート・波尔カ》 ●《皇帝円舞曲》
 ●《ラデツキー行進曲》 作品228 ほか全12曲
 ロリン・マゼール (指揮)

ワグナー 1

vol.27

- 楽劇4部作《ニーベルングの指環》～ハイライツ～
- 楽劇《ラインの黄金》より
《ワルハラ城への神々の入場》
- 楽劇《ワルキューレ》より《ワルキューレの騎行》
《ウォータンの別れと魔の炎の音楽》
- 楽劇《ジークフリート》より《森のささやき》
- 楽劇《神々のたそがれ》より
《ジークフリートのラインへの旅》
《ジークフリートの葬送行進曲》 ほか
サー・ゲオルグ・ショルティ (指揮)

リスト／サン＝サーンス

vol.28

- ハンガリー狂詩曲 第2番
- 交響詩《前奏曲》
- 組曲《動物の謝肉祭》
ジュゼッペ・シノーポリ／カール・ベーム (指揮)

マーラー 1

vol.29

- 《大地の歌》
レナード・バーンスタイン (指揮)
- ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ (Br)
- ジェイムス・キング (T)

シュトラウス・ファミリー 2

ワルツ・ポルカ名曲集

vol.30

- ワルツ《ウィーンの森の物語》作品325
- 《加速度円舞曲》作品234
- 《爆発ポルカ》作品43
- ワルツ《春の声》作品410
- 《アンネン・ポルカ》作品117
- ワルツ《美しき青きドナウ》作品314
- ワルツ《酒・女・歌》作品333
- 《ペルシャ行進曲》作品289
- 《ロシア行進曲》作品426
- 《かじやのポルカ》作品269
- ワルツ《天体の音楽》作品235
- ワルツ《オーストリアの村つばめ》作品164
ウィリー・ボスコフスキー (指揮)
- ウィーン国立歌劇場合唱団

ブラームス 4

vol.31

- ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77
- 交響曲 第3番 ヘ長調 作品90
オイゲン・ヨッフム／カール・ベーム (指揮)
- ナタン・ミルシテイン (Vn)

チャイコフスキー 4

vol.32

- 序曲《1812年》 作品49
- 交響曲 第5番 ホ短調 作品64
クリストフ・フォン・ドホナーニ／
リッカルド・シャイー (指揮)

マーラー 2

vol.33

- 交響曲 第4番 ト長調
クラウディオ・アバド (指揮)
- ゲルハルト・ヘッツェル (Vn)
- フレデリカ・フォン・シュターデ (Ms)

プッチーニ

vol.34

- 歌劇《トスカ》～ハイライツ～
- 歌劇《蝶々夫人》～ハイライツ～
ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)
- ルチアーノ・パヴァロッティ (T) ミレツァ・フレニ (S)

シューベルト 2

vol.35

- 交響曲 第8番 (旧第9番) ハ長調 D. 944
《ザ・グレイト》
- 劇音楽《ロザムンデ》 D. 797
イシュトヴァン・ケルテス／
カール・ミュンヒンガー (指揮)

モーツァルト 4

vol.36

- 歌劇《魔笛》 K. 620～序曲／
- クラリネット協奏曲 イ長調 K. 622／
- フルートとハーブのための協奏曲 ハ長調 K. 299
サー・ゲオルグ・ショルティ／
カール・ミュンヒンガー (指揮)

R・シュトラウス 2

vol.37

- 交響詩《英雄の生涯》 作品40
- 交響詩《ドン・ファン》 作品20
サー・ゲオルグ・ショルティ／ロリン・マゼール (指揮)
- ライナー・キュッヒル (Vn)

モーツァルト 5

vol.38

- 歌劇《フィガロの結婚》 K.492 ～ハイライツ～
ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)
- ホセ・ファン・ダム (Br)
- イレアナ・コトルバス (S)

ブルックナー 1

vol.39

- 交響曲 第4番 変ホ長調《ロマンティック》
(1878/1880年版)
ベルナルト・ハイティンク (指揮)

ワグナー 2

管弦楽曲集

vol.40

- 歌劇《タンホイザー》序曲
- 歌劇《さまよえるオランダ人》序曲
- 歌劇《ローエングリン》より
第一幕への前奏曲、第三幕への前奏曲
- 楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》より
第一幕への前奏曲
- 楽劇《トリスタンとイゾルデ》より 前奏曲と愛の死
サー・ゲオルグ・ショルティ／ホルスト・シュタイン（指揮）

リムスキー = コルサコフ

vol.41

- 交響組曲《シェエラザード》作品35
- 序曲《ロシアの復活祭》作品36
アンドレ・プレヴィン／小澤征爾（指揮）
- ライナー・キュッヒル（Vn）

メンデルスゾーン／シューマン

vol.42

- 劇音楽《真夏の夜の夢》作品61より
〈結婚行進曲〉ほか
- 交響曲 第1番 変ロ長調 作品38《春》
アンドレ・プレヴィン／リッカルド・ムーティ（指揮）

モーツァルト 6

vol.43

- ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調
K. 219《トルコ風》
- 交響曲 第38番 ニ長調 K. 504《ブラハ》
ジェイムス・レヴァイン（指揮）
- イツァーク・パールマン（Vn）

スッペほか

フロムナード・コンサート

vol.44

- 喜歌劇《軽騎兵》序曲
- 喜歌劇《ウィーンの朝・昼・晩》序曲
- 劇音楽《詩人と農夫》序曲
- ワルツ《金と銀》作品79
- 《3つの軍隊行進曲》第1番 ニ長調 D733-1
（ヴァインガー編曲）
- 歌劇《オイリアンテ》序曲
- 歌劇《ウィンザーの陽気な女房たち》序曲
サー・ゲオルグ・ショルティ／ウィリー・ボスコフスキー／
ハンス・クナッパーツブッシュ／ホルスト・シュタイン（指揮）

ブルックナー 2

vol.45

- 交響曲 第7番 ホ長調（ノヴァーク版）
カルロ・マリア・ジュリーニ（指揮）

ベートーヴェン 5

vol.46

- ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61
（カデンツァ：フリッツ・クライスラー）／
- 劇音楽《エグモント》序曲 ヘ短調 作品84／
- 序曲《献堂式》ハ長調 作品124
キリル・コンドラシン／
ハンス・シュミット＝イッセルシュテット（指揮）
チョン・キョン＝ファ（Vn）

ハイドン 1

vol.47

- 交響曲 第94番 ト長調《驚愕》／
- 交響曲 第101番 ニ長調《時計》
ピエール・モントゥー（指揮）

シューマン

vol.48

- ピアノ協奏曲 イ短調 作品54
- 交響曲 第3番 変ホ長調 作品97《ライン》
ギュンター・ヴァント／ズービン・メータ（指揮）
ヴィルヘルム・バックハウス（P）

メンデルスゾーン

vol.49

- 交響曲 第3番 イ短調 作品56《スコットランド》
- 交響曲 第4番 イ長調 作品90《イタリア》
クリストフ・フォン・ドホナーニ（指揮）

ハイドン 2

vol.50

- 交響曲 第100番 ト長調《軍隊》
- 交響曲 第104番 ニ長調《ロンドン》
カール・ミュンヒンガー／ヘルベルト・フォン・カラヤン（指揮）

※楽曲・演奏者などの内容は、変更になる場合がありますのでご容赦ください。
また上掲の全巻収録曲目は、添付CDの曲順と異なる場合があります。

Next Issue

第2巻
2月2日(火)発売
価格 1,190円

ウィーン・フィル
魅惑の名曲
vol.2



チャイコフスキー ①

3大バレエ

《白鳥の湖》／《くるみ割り人形》／《眠れる森の美女》
指揮＝ヘルベルト・フォン・カラヤン

[CD収録曲] Total Time 1:9:20

バレエ組曲《白鳥の湖》作品20

①1.情景(第2幕) ②2.ワルツ(第1幕) ③3.小さな白鳥たちの踊り(第2幕) ④4.情景と白鳥の王女の踊り(第2幕) ⑤5.チャルダシュ(ハンガリーの踊り)(第3幕) ⑥6.フィナーレ(第4幕)
バレエ組曲《くるみ割り人形》作品71a

⑦1.小さな序曲(第1幕) ⑧2.特徴のある踊り ⑨a.行進曲(第1幕) ⑩b.こんぺい糖の精の踊り(第2幕) ⑪c.ロシアの踊り“トレパーク”(第2幕) ⑫d.アラビアの踊り(第2幕) ⑬e.中国の踊り(第2幕) ⑭f.あし笛の踊り(第2幕) ⑮3.花のワルツ(第2幕)

バレエ組曲《眠れる森の美女》作品66

⑯1.序奏とリラの精(プロローグ) ⑰2.アダージョ:バダクシオン(第1幕) ⑱3.パ・ド・カラクテール“長靴をはいたネコと白いネコ”(第3幕) ⑲4.パノラマ(第2幕) ⑲5.ワルツ(第1幕)

アート・ディレクション 渡辺禎則 (Webooks)
デザイン 小野塚学 (Webooks)
〈P2～5、18〉構成・執筆 西村美穂 (くるみ企画室)
イラスト 塩井浩平
校正 オフィス・タカエ
企画協力 株式会社 ウィーヴ
編集協力 株式会社 アルク出版企画
協力 サントリーホール
編集 矢野文子
制作企画 速水健司
制作 岸 義彦
資料 池田 靖
宣伝 後藤昌弘 安野宏和
販売 永井真士 川村善弘
広告 鶴岡朱美

隔週刊 小学館 CDつきマガジン

ウィーン・フィル 魅惑の名曲 通巻1号

発売日 2010年1月19日
発行 株式会社小学館
〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話 (編集) 03-3230-5118
(販売) 03-5281-1771

発行人 蔵 敏則
編集人 清水芳郎
CD製作 ユニバーサル ミュージック合同会社
印刷 大日本印刷株式会社
製本 共同製本株式会社

©小学館 2010 ●図書館の方へ:本誌およびCDは、館内・館外貸出しを許諾します。造本には十分注意しておりますが、印刷、製本など製造上の不備がございましたら、「制作局コールセンター」(☎0120-336-082)にご連絡ください。(電話受付は土・日・祝祭日を除く9時30分～17時30分です) ④日本複写権センター委託出版物) 本誌を無断で複写(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本誌をコピーされる場合は、事前に日本複写権センター(JRRC)の許諾を受けてください。JRRC(☎03-3401-2382)

※この企画は2001年、株式会社 アスキー発行『ウィーン・フィル 世界の名曲』を再編集したものです。
※本誌のP6～17は上記2001年版(構成:アルク出版企画、デザイン:ドゥプラン)に加筆・修正のうえ再掲載したものです。

ウィーン・フィル 魅惑の名曲 vol.1

The Wonderful Sounds of Wiener Philharmoniker

contents

- | | | |
|----|--------------------|--|
| 02 | 連載エッセイ | ウィーン・フィルをめぐる断章——岡田暁生
vol.1 ウィーン・フィルの「魅力」とは何なのか? |
| 05 | 連載コラム | マエストロの横顔——諸石幸生
小澤征爾 ウィーン・フィルとの幸福なる成果 |
| 06 | 音楽エッセイ | ウィーン・フィルを聴く①——金子建志
まろやかな音色の秘密 |
| 10 | 基礎から学ぶ
クラシック講座 | 作曲家の肖像——ひの まどか
ドヴォルザーク 1 |
| 14 | 基礎から学ぶ
クラシック講座 | 曲の情景——ひの まどか
アメリカとボヘミアの大地に育まれた名曲 |
| 18 | 名曲をより楽しく聴くためのキーワード | |

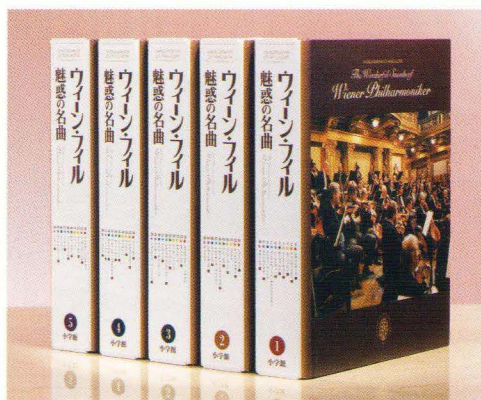
CD vol.1

ドヴォルザーク ①

交響曲 第9番 ホ短調 作品95《新世界より》
指揮＝小澤征爾 録音＝1991年 ★ライヴ・レコーディング

スラヴ舞曲集 第1・3・8・10・16番
指揮＝アンドレ・プレヴィン 録音＝1993年

COVER PHOTO by ND CHOW



小学館CDつきマガジン

ウィーン・フィル
魅惑の名曲
特製バインダー

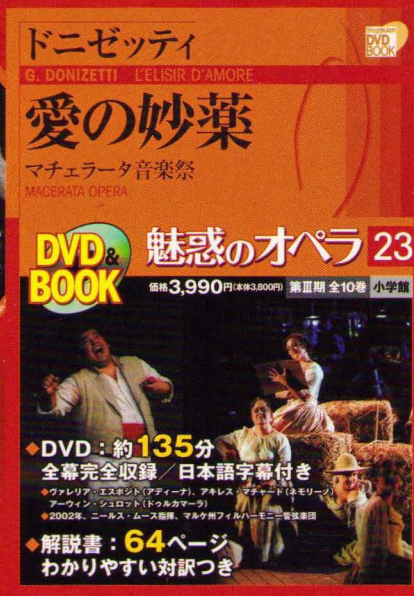
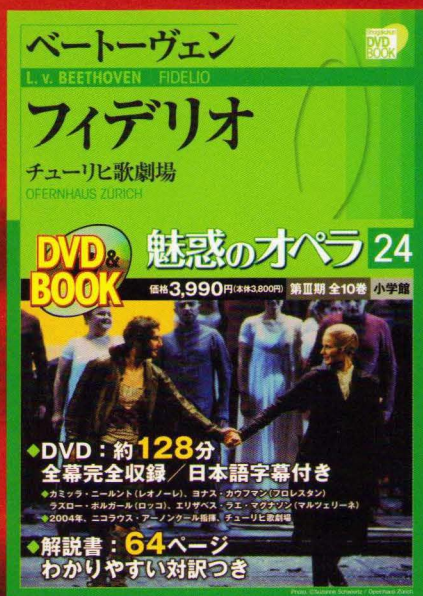
価格 980円(税込)
本体933円
※バインダー1部の価格です。

特製バインダーをぜひあなたのライブラリーに

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の貴重な写真とロゴをあしらった、格調高いマガジン保存用バインダー。1部に本誌10冊がとじられ、5部お求めになると全50冊を収納できます。背表紙用には「発刊順」<音楽史順>2種類のシールが付属していますので、全巻収納すればCD鑑賞ガイドとして最適な「ウィーン・フィル全集」が完成。また必要な部数だけお求めいただき、お気に入りの指揮者や作曲家だけを収納したオリジナル保存版にもご活用ください。

このバインダーはマガジン用です。CDは収納できません。お近くの書店にてお求めいただけます。店頭がない場合はご注文いただくか、小学館ホームページからご購入いただけます。

<http://sgkn.jp/wien-cd/>



これぞオペラの醍醐味。

ぜひ見ておきたい名作を、納得の名演で、
存分にご堪能ください。

ベートーヴェン唯一のオペラ

24 フィデリオ

全幕完全収録 対訳つき
日本語字幕付き DVD & 解説 BOOK

魅惑のオペラ

第Ⅲ期・21～30巻

価格（各）3,990円（税込）各巻DVD1枚＋解説BOOK（A5判／64ページ、収納カバーから取り外し可能）

21 プッチーニ マノン・レスコー 21巻のみ発売記念特別価格 3,570円（税込）※2010年5月末日まで
ミラノ・スカラ座、1998年、ムーティ指揮 マリア・グレッグーナ／ホセ・クーラ

22 ヴェルディ オテロ ミラノ・スカラ座、2001年、ムーティ指揮 ブラシド・ドミンゴ／バルバラ・フリットリ／レオ・ヌッチ

23 ドニゼッティ 愛の妙薬 マチエラータ音楽祭 2002年、ムース指揮 ヴァレリア・エスポジト／アキレス・マチャード

24 ベートーヴェン フィデリオ 2010年1月中旬刊
チューリヒ歌劇場 2004年、アーノンクール指揮 カミッラ・ニールント／ヨナス・カウフマン

25 ヴェルディ リゴレット 2010年2月中旬刊 ◆日本語字幕付き初DVD化
バルセロナ・リセウ大劇場 2004年、ロベス＝コボス指揮 カルロス・アルバレス／マルセロ・アルバレス／インヴァ・ムーラ

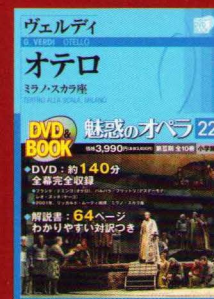
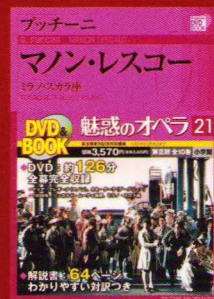
26 ワグナー タンホイザー 2010年3月中旬刊
バイロイト祝祭劇場 1989年、シノーポリ指揮 リチャード・ヴァーサル／チェリル・ステューダー／ハンス・ゾーティン

27 ジョルダーノ アンドレア・シェニエ 2010年4月中旬刊
ミラノ・スカラ座 1985年、シャイー指揮 ホセ・カレーラス／エヴァ・マルトン／ピエロ・カブッチリ

28 ヘンデル セルセ 2010年5月中旬刊
ドレスデン音楽祭 2000年、ルセ指揮 レ・タラン・リリク ポーラ・ラスマッセン／イザベル・バイラクダリアン／サンドリーヌ・ピオー

29 ベルク ヴォツェック 2010年6月中旬刊
ベルリン・シュターツカペレ 1994年、バレンボイム指揮 フランツ・グルントヘーバー／グレアム・クラーク／ヴァルトラウト・マイアー

30 モーツァルト 皇帝ティートの慈悲 2010年7月中旬刊 ◆日本語字幕付き初DVD化
グライントボーン・フェスティヴァル・オペラ 1991年、A・デイヴィス指揮 フィリップ・ラングリッジ／アシュレイ・ブットナム／ダイアナ・モンタギュー



熱いご要望に応え、
第Ⅲ期続々刊行中！

既刊01～20巻、特別版（全4巻）も書店にて好評発売中！

くわしくは <http://sgkn.jp/operadvd/> でご覧ください。

小学館